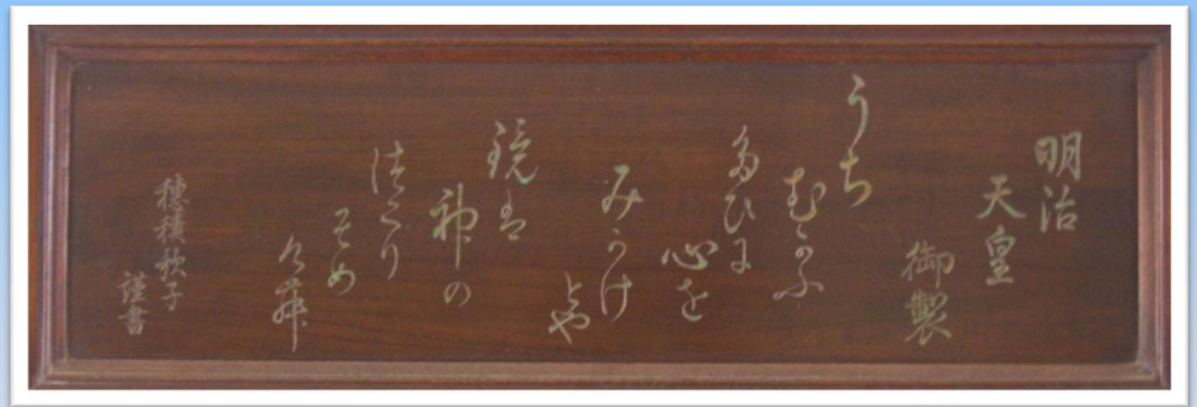


明治天皇御製和歌

「うちむかふ…」



穂積歌子 謹書

明治国家最盛期の法学者穂積陳重（ほづみのぶしげ）の妻、また実業家渋沢栄一の娘

わ げ ん あ い ご

# 揮毫「和顔愛語」

「和顔愛語」は、無量寿經に出てくる仏教の言葉（四字熟語）で、温かい笑顔で思いやりのある言葉を使うという意味です。

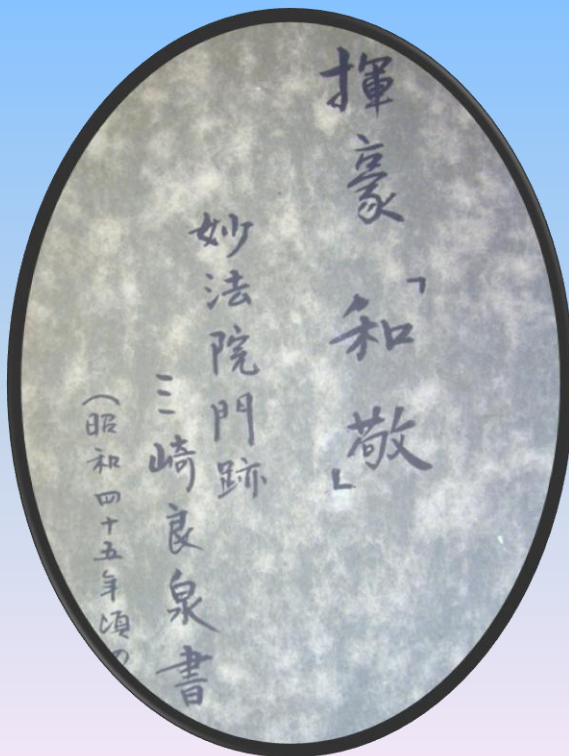
- ①人々はよく挨拶し、笑顔で応対するようになります。
- ②相手の言い分をよく聞くようになります。たとえ無理な言い分であっても、何とか工夫して期待に沿う努力をし、どうしてもできないときは後で丁寧に理由を説明して断ります。
- ③陰口を言いません。
- ④心が平和になります。

堂眞



わ け い  
揮毫 「和敬」

心をおだやかにして慎み、相手を敬うこと。茶道で重んじる精神の一つ。



妙法院門跡  
三崎良泉書  
(昭和45年頃の書)



# 渋沢栄一翁の写真

1840 (天保11) 年 2月13日生誕  
1931 (昭和6) 年 11月11日永眠

## 穂積歌子さん寄贈

明治国家最盛期の法学者穂積陳重 (ほづみのぶしげ)  
の妻、また実業家渋沢栄一の娘



大正15年  
1月20日撮影



# 扁額「本立而道生」

『論語』の孔子語録「本立而道生(もとたちて、みちしょうず)」という言葉

その意味は、  
「物事の本質を究めることのできる人であれば、自ずから道も開ける」、  
「ものの本質を究めることができる人の育成」が教育の根本である。



八十八翁青淵書

およそ人たる者は、その事进行处理するに、必ず本を努めねばならない。「君子ハ、本ヲ務ム、本立チテ道生ズ」

花の咲く桜も、その本は木である。その木のもう一つの本は根である。その根、すなわち、その本が充実しなければ美しい花が咲かない。

【渋沢栄一訓言集】





2. 有子曰、其爲人也、  
孝弟而好犯上者、鮮矣、  
不好犯上而好作亂者、  
未之有也、  
君子務本、**本立而道生**、  
孝弟也者、其爲仁之本與。



### 【原文の読み】

有子(ゆうし)が曰わく、其の人と爲(な)りや、  
孝弟にして上(かみ)を犯すことを好む者は、鮮(すく)なし。  
上を犯すことを好まずして、亂(らん)を作(な)すことを好む者は、  
未だこれ有らざるなり。  
君子は本(もと)を務(つと)む。本立ちて道生(しょう)ず。  
孝弟なる者は、其れ仁(じん)の本たるか。

### 【原文の意味】

有子がいわれた、『その人がらが孝行悌順でありながら、  
目上にたてつく者など少ないよ。目上にたてつくことを好  
まないのに、乱れを起こすことを好むような者は、めった  
にいない。  
君子は、根本のことに努力する。根本が定まってはじめて、  
進むべき道もはっきりする。孝と悌ということこそが、  
仁徳の根本だろうと思う。』

### 【注釈】

有子: 孔子の門人。(姓は有、名は若)。  
孝行悌順: 孝は父母に仕えること。悌は兄や年  
長者に仕えること。  
仁徳: 仁は孔子のとなえた最高の徳目。人間  
の自然な愛情にもとづいたまごころの徳  
である。

# 石碑「進吾往也 以和為貴」

「進むは吾が往く也」  
「和をもって貴しとなす」

その意味は、  
「自分のことは自分でやる、つまり自分からやる気をおこすこと」。同時に大切なのは「人と人との間には常に調和と協力が必要である」。

そして、次に大切となるのが、「和して同ぜず、調和して行く中にも自分のものは一本しっかり持ちなさい」という教えである。



昭和42年2月24日建立

洪沢栄一翁の甥  
『洪沢元治』博士の  
書(92歳)



# 石碑「木欣欣以向榮」

歸去來兮（帰りなんいざ） 陶淵明

「木は欣欣として榮に向かい」

その意味は、  
「木々は嬉々として繁茂し始める」



渋沢栄一翁の甥  
『渋沢元治』博士の書  
(98歳)

豊里中学校昭和47年度卒業生  
建立 昭和48年3月

「さあ帰ろう。ふるさとの田園はまさに荒れようとしている。帰らないわけにはいかないだろう」ではじまるこの作品は日本で最も愛されている漢詩のひとつである。





帰去来兮 請息交以絶遊 世與我而相遺 復駕言兮  
焉求 悦親戚之情話 楽琴書以消憂 農人告余以春  
及 将有事于西畴。或命巾車 或棹孤舟 既窈窕以  
尋壑 亦崎嶇而經丘 木欣欣以向榮 泉涓涓而始  
流 善萬物之得時 感吾生之行休 已矣乎 寓形宇  
内復幾時 曷不委心任去留

帰去来兮(帰りなんいざ)，請う交を息め以て遊を絶たん，世と我と而かも相い遺る，復駕せよ言兮焉ぞ求めん，親戚の情話を悦び，琴書を楽んで以て憂を消す，農人余に告ぐるに春の及ぶを以てす，将に西畴に事あらんとす，或は巾車に命じ，或は孤舟に棹さす，既に窈窕として以て壑を尋ね，亦崎嶇として丘を經る，木欣欣として以て榮に向かう，泉涓涓として始めて流る，萬物の時を得るを善し，吾が生の行く休むを感じ，やんぬるかな，形を宇内に寓すること復た幾時ぞ，曷ぞ心に委して去留に任せざる，

帰りなん，請う俗人と交遊を絶たん，俗人と我は、もとより相い遺れる，私は駕して帰るに及ばない。世に於いて何かを求めん，帰田後のことは如何、親戚の情話も事実の話は虚偽がない。もしも憂いを生ずる時は琴書を楽みを求める，耕作の時節は農人が来て私にに告げる、西畴今正に耕作すべじであると、或は巾車，或は孤舟、時には，窈窕に壑を尋ね，亦崎嶇たる高丘を登る，草木は欣欣として榮に向かう，河泉は涓涓として始めて流る，萬物の発生、時を得るを善し，この時に当たり私が生の行く休むを感じ，やんぬるかな，形を宇内に寓すること復た誰も長久の者はない。幾時ぞ，曷ぞ心に委して去留に任せざる。

帰去来兮（帰りなんいざ） 陶淵明